駒沢大学
教授　富倉徳次郎著

無名草子評解

東京　有精堂

著者略歴

京都大学文学部国文学科卒、現在駒沢大学教授
〔書著〕兼好法師研究
無名草子新註・平家物語評解・方丈記評解・新註平家物語・詳註平家物語
等

昭和二十九年九月一日印刷 昭和二十九年九月十日発行 昭和三十四年十月二十日十六版発行	無名草子評解
著作者	富倉徳次郎
発行者	東京都千代田区神田神保町一ノ三九 山崎清一
印刷者	東京都新宿区山吹町三〇五 帝都第一印刷株式会社
発行所	東京都千代田区神田神保町一丁目卅九番地 振替口座東京四〇六八四番 有精堂出版株式会社

定価 ¥330

序

無名草子は源氏物語以下の平安時代の物語の評論書として有名であるが、同時にそれは平安朝時代の女性評論書としても、興味深いとは、よく言われることである。

しかし更に私は、無名草子はそうした書として読む以上に、むしろこれを鎌倉時代の一女性が、女性の立場に立って、真面目に人生を思い、文藝を愛し、その結果書かずにいられない気持で書いた一つの冊子として読む時、もっとよくその本質がわかるものだといゝたいと思っている。それは今こうしてこの草子の注解を試みて、いよ〳〵その感が深いのである。

勿論物語批評書という立場からいって、この草子は重要な史的意義を持つものにちがいないが、しかし同時にそこにはいかつい評論という以上に、当年の女性が、数々の物語を楽しみ読んでみて、本当に感じとったことが正直に書き止められている点に、当年の女性の魂の声が聞きとれるし、また女性評論書といっても、それは当年の説話文学によく見るような単なる平安女性の逸話集というのではなくて、作者の女性としての心からの憧憬、人の世についての一つの理想が、その中に籠められ語られているところに、これを読むわれ〳〵の心に触れるものがあるといえるのである。

私にとって、無名草子は研究書であると共に、また読みごたえある一つの文藝作品なのである。

私が「無名草子新註」を上梓したのは、もう十七年前のことである。その間岩波文庫本としてその本文を校訂したこともあったが、遂に註解の仕事はあらわれなかった。こうした仕事は度々人からすすめられたが、今度たま〳〵有精堂専務山崎誠君や編集長川村治助君のすゝめもあり、こゝに本書を脱稿したわけであるが、思えば無名草子との縁は永い。今こゝに過去の諸著作の誤りや不足を補うことを得たが、無名草子の註解の仕事にはなお今後の研究に俟つところ多いのを知っている。研究諸家の高教を後て、順次改訂増補して行きたいと思っている。なお本書の挿絵・編集については、終始変らぬ川村治助君の熱意に負うところ大きい。こゝに心からなる感謝の意を表する。

昭和二十九年八月二十日

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

凡　例

一、本書は無名草子の全文の解釈を目的として作ったものである。本文・口訳・語釈・参考・余説の五つから成る。

口訳はつとめて原文に即して、直訳の形をとったが、無名草子の物語批評であるところから、まま多くの語を補なうことによって、意味を取りやすくしようと試みた。しかし、すべて原文に無い語句は括弧（　）で包むことによって混乱を来さないようにした。

参考には無名草子の批評を理解するに必要と思われる物語の本文を引用所載した。

余説は鑑賞・研究などを随時記した。

一、附録に無名草子所載散逸物語資料と「源氏こゝろくらべ」とを入れたが、これは研究家の便をはかったものである。

一、仮名遣いは無名草子本文に於ては、歴史的仮名遣いを用い、その他はすべて現代仮名遣いを用いた。

目次

解題

一、いとぐち　一

二、内容と価値　二

三、成立年次と作者　九

四、諸伝本と題号　一〇

五、研究書　一三

評解

一、いとぐち　一六

二、月　二三

三、文　三七

四、夢　三九
五、涙　四一
六、佛　四三
七、源氏物語　五〇
イ　巻々の論　五四
ロ　女の論　六二
ハ　男の論　八〇
ニ　ふしぶしの論　九五
八、狭衣物語　一四一
九、夜半のねざめ　一五八
一〇、浜松中納言物語　一八九
一一、玉藻　二一一
一二、とりかへばや　二二三

一三、かくれみの　二二五
一四、今とりかへばや　二二七
一五、春宮の宣旨・あさくれ・川霧・岩うつ浪　二二六
一六、海人の苅藻　二三〇
一七、末葉の露・露のやどり　二三九
一八、みかはにさける・宇治の河浪　二四二
一九、こまむかへ・おたへのぬま　二四五
二〇、初雪　二四七
二一、うきなみ・松浦の宮　二四八
二二、今の世の物語　二五〇
二三、伊勢物語・大和物語　二五二
二四、八代集　二五六
二五、私撰集・題の歌　二六〇

二六、女　二六五
二七、小野小町　二六七
二八、清少納言　二七二
二九、小式部内侍　二七七
三〇、和泉式部　二八〇
三一、宮の宣旨　二八六
三二、伊勢の御息所　二九〇
三三、兵衛内侍　二九二
三四、紫式部　二九四
三五、定子皇后・上東門院　三〇〇
三六、枇杷殿の皇太后宮　三〇八
三七、大斎院　三一一
三八、小野皇太后宮　三一四

三九、男　三一七

附録　三一九

無名草子所載散逸物語資料　三一九

源氏こゝろくらべ　三四九

源氏四十八ものたとへの事　三四九

源氏人々のくらべ　三五二

索引　三五七

和歌・歌謡索引　三五八

語句索引　三六〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

解　題

一　いとぐち

無名草子は、王朝女流の手になった数々の物語書の批評書として、今日まで残されたものの中、最も古いものの一つである。しかもそれは単に王朝物語類の批評書という以上に、その後半をなす王朝女流論を見ると、それがかの大鏡が当年の男性批評の物語であるに対して、王朝女流批評の物語として筆を執られていると見ることが出来るのである。それはあくまでも女性の立場に立って、王朝時代の美しきものとして、物語と女性群像とを描いた一つの物語であると見得るのである。

無名草子の成立年次は、その本文の内容から鎌倉時代初頭の建久七年（西暦一一九六）以降建仁二年（西暦一二〇二）閏十月迄の間と推定し得るのであるが、これは正に平安時代末より鎌倉時代初頭にかけて、源氏物語を始めとして王朝の諸物語が次第に一つの過去の文学作品として鑑賞批判せられ、厳密な意味ではなお批評の語には当てはまらぬにせよ、とにかく批評の対象として考えられ、また一方事実に於て、宮廷女流ならぬ男性達の手によってそれらを庶幾した擬古物語類も出て来た時代に生れたといい得るのである。そこには王朝物語に対する憧憬と批判とが正に存在し又要求された。無名草子はかくて現れるべき時に現れた王朝物語批評の書ともいえるのである。

無名草子が記す所によると、これより先既に「初雪」という物語があり、それに「物語の事」があったという。恐らくそれには物語批評の事が見えたであろうと考えられるが、惜しいかな、それは今日伝つていない。又「とりかへばや」にも源氏物語の雨夜の品定め風の物語の評論があったようであるが、これも今日は散逸の運命にあるのである。ただ源氏物語のみを対象とした批評書となると、「源氏人々の心くらべ」「伊勢源氏十二番女合」「源氏四十八のものたとへの事」がある。これらは成立年次は明かでないが、その内容から見て、ともに無名草子と近い頃の成立と考えて然るべきものと考えられる。しかし、これらを、源氏物語批評という点からだけ見ても、その規模に於て、量に於て、到底無名草子に匹敵すべきものではない。また無名草子と殆んど同時代の作として、源氏一品経や今鏡の「作り物語の行方」の如き源氏物語の教誡の書としての価値を考え論じた作もあるが、これも当年の一部の物語の本質論として興味深い点はあっても、源氏物語の内容の批評という意味では、殆んどいうに足りないのである。かくて、無名草子の王朝物語批評の書としての価値は極めて高いものとなるのである。

二　内容と意義

無名草子は大体次の四部から成つている。

二、物語の批評
三、歌集の批評
四、女性の批評

而して一篇の構想には大鏡の影響と康頼法師の宝物集の影響とを見のがせない。

場所は最勝光院の近くの一桧皮葺の家、語る者は若い女性三四名。これらが物語通の一女房を中心に、或いは反対の意見を述べ、或は話の継ぎ穂を与えて、話をすすめてゆくのであるが、これは大鏡の手法に近い。草子の最後にも男性批評に話を移すと見せて、

「『世繼大鏡などを御覽ぜよかし。それに過ぎたる事は何事かは申すべき。』といひながら。」

と記しているが、ここにも作者の意図が、大鏡に対抗して女性を描く所にあつた事が見られるのである。

而してこの若き女房達の話の聞手としての一人の老尼が描かれ、これがこの草子の著者の立場に立つことになるわけであるが、若き女性達が王朝物語類をその批評の中心に持ち来たすまでに、まずこの世で最も尊いものを挙げつつ、月・文・夢・涙・仏と辿つて行き、遂に物語に至るのは、宝物集の手法に近い。宝物集は治承二年頃の成立と思われるが、この書がこれに直接に負うているか否かはとにかくとして、文学史的には同一手法によつたものといい得る。

序につずいて、まず物語批評が出るが、作者の意図は本来平安時代の物語の批評がその中心であつ

て、それが必然的に歌集・女性の批判へと移つてゆくものと思われる。

無名草子が挙げて批判の対象にした物語は、源氏物語以後のものである。竹取・空穂・住吉等の物語が見えないのは先ず目につくが、これは作者が意識して行つた事であろう。源氏物語を論じた所に、

「それ（源氏物語）より後の物語は思へばやすかりぬべきものなり。かれを才覚にて作らむに、源氏に勝りたらむ事は作り出す人ありなむ。わづかに宇津保・竹取・住吉などばかりを物語とて見けむ心地、さばかりに作り出でけん凡夫のしわざとも覚えぬこととなり。」

といつているが、作者は源氏物語以前の物語は、源氏物語以後のそれに比しては、素朴な現実味の足りぬものであり、一時代前の物語として源氏以後の物語とは同一には見ていないのであろう。それは、歌集の論に於ても、万葉集を別扱いにして取扱わないことと相応じている。

さて、物語論の大部分は源氏物語論であるが、全体としては古きものと、今様の物語とに分けられているが、相当こまかな批判を受けているのは、「狭衣」・「濱松」・「夜半の寝覚」・「今とりかへばや」で、これに次ぐものは、「海人の刈藻」である。

今源氏物語の批評を見ると、それは巻々の論・人物論・内容論と分けてある。巻々の論としては

あわれなる巻

えんある巻

見所ある巻

面白くめでたき巻
心ゆきうれしき巻

と分けられる。大体「あはれなる」「えんある」「見所ある」の三つに分けてあると考えられる。しかして、これらの分類は、既に「心にしみてめでたくおぼゆる巻々は」との問いに答えたもので、この巻々の論を通して考えてみると、この草子の筆者は、巻々の持つ美的価値を、「あはれなる」と「えんある」との二つの大きな美の範疇によつて分け、これらの上位の美の概念として「めでたし」を考えていると思われるのである。しかして、更に「悲し」「心苦し」「面白し」「いみじ」「をかし」「うるさし」「うれし」などの語が用いられているが、それらは、「あはれなる」「えんある」の二範疇より下位の、いわばこの二つの美のその物語中の事件に於てあらわれる姿態であるといえよう。換言すれば、各事件の読者に与える感情は「悲し」「心苦し」「面白し」「いみじ」「をかし」「うるさし」などであり、これらが「あはれ」と「えん」との二つの美的情趣を生み、そこに美の二大区分が成立する。しかしてこれらが「めでたし」といわれる客観的価値を持つと考えられるのである。

この巻々の論は、この著者の文芸作品への批評態度、その美観をよく示しているが、これらの巻々に対する美的批判を更に具体的に述べたものが、内容論と人物論とであると考え得るのである。

内容論は、「あはれなるふしぶし」「いみじきふしぶし」「いとほしきふしぶし」「あさましきふしぶし」と分けられているが、この「あはれなるふしぶし」の「あはれなる」は、巻々の論の「あはれなる」

が「えんある」に対する情感的情趣美を意味するに比すると、より狭義のもので、内容のもつ感情的感銘をいっていると解せられるし、「心やまし」「あさまし」の項目には、道徳的にいかがわしい所為ある所の挙げてあることが注意せられて、この著者の道義の心の強さを考えさせられるのである。

又人物論は「めでたき人」「好もしき人」「いみじき人」「いとほしき人」と分け得るが、それは客観的批評というよりも主観的好悪からわづかに一歩出た程度の主観批評に止まつているのを見る。しかしただ「めでたし」「好もし」「いみじ」「いとほし」の如き低次の主観的批評語もなお平安時代の美的理想に照されて使われている事は注意すべきである。

私はこの内容論・人物論を見る時、巻々の論にみえたかの美的批判が、情趣中心であり多分に感傷的ではあるが、なお人間性の道徳的純潔と同情的愛情を尊ぶ心によつて裏づけられていることを具體的に見ることが出来ると思うが、同時にその批評では、作中人物の個別的な捉え方や、事件内容の孤立的な把握が主となっているために、物語の全體としての文藝性への追求、その本質への考察に至っていない點は見落してはならないと思うのである。しかしとにかくそこには「もののあはれ」と呼ぶ平安時代の物語文学の理念が、人性的情趣美としてその批判の中軸をなしているとはいえると思われるのである。

この源氏物語論につづく各物語の論もまず同様である。今便宜その総評を表示しておこう。

源氏　めでたし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo